

室内楽演奏オーディション合格者による披露演奏会

第25回 室内楽コンサート

2022年2月24日（木）

18:00 開演 [17:30 開場]

洗足学園 前田ホール

△新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございいます。

主催：洗足学園音楽大学・大学院

ごあいさつ

本日は洗足学園音楽大学「室内楽オーディション合格者による披露演奏会 第25回室内楽コンサート」において頂き心より御礼申し上げます。洗足学園音楽大学における《室内楽》の位置づけは個人の演奏技術の構築の過程で複数人のアンサンブルによる、音楽における主張や会話を通して様々な楽器の歴史、形式を学び表現する重要な講座であります。

バロック時代以前は《室内声楽様式》《室内楽様式》と呼ばれ一般庶民も音楽を楽しんでいましたが、バロック時代になると貴族の音楽として発展した宮廷楽師による《室内の音楽（カメラ＝室(へや)と表現されていた)》は高貴な音楽とされ、庶民が触れることはありませんでした。

ハイドン・モーツァルト・ベートーヴェンが構築した次の古典派の時代には弦楽四重奏を中心とした《室内楽》に移行し、ソナタ形式を確立し次第に庶民の芸術として広まりました。

さらにピアノの発達とともに様々な楽器種の組み合わせが広がりを生み、ロマン派、印象派、そして現代へと着実にその裾野を広げ今や音楽の中心といえる分野となりました。

本日選抜された《室内楽》グループはそれぞれに、日ごろの練習成果を発揮してくれることに期待し、御来場の皆様と共に最後まで、熱い演奏を楽しみたいと思います。

将来の学生の楽壇への活躍を祈りつつ、皆様への御挨拶とさせていただきます。

洗足学園音楽大学・大学院教授
室内楽研究運営委員会委員長

渡部 亨

Program

打楽器四重奏

D.スキッドモア／リチュアル ミュージック

David Skidmore // Ritual Music

Per. I 山野 智広(学 2) Per. II 宗像 桃子(学 2) Per. III 横木 秀真(学 3) Per. IV 栃下 紗奈(学 3)

サクソフォーン四重奏

T. エスケシュ／サクソフォーン四重奏のための《ル・バル》

Thierry ESCAICH (b.1965) // Le bal pour quatuor de saxophones

S.Sx. 矢澤 亘(学 3) A.Sx. 兼田 柊子(学 3) T.Sx. 兼重 未唯(学 3) B.Sx. 久米 愛海(学 3)

木管五重奏

P. ヒンデミット／5つの管楽器のための小室内楽曲 作品 24-2

1. 愉快地 中くらいの速さの 4 分音符 2. 円舞曲 一貫して非常に弱く

3. 静かで簡素に 8 分音符 4. 速い 4 分音符 5. 非常に活発に

Paul Hindemith (1895-1963) // Kleine Kammermusik für fünf Blasinstrumente Op. 24-2

I. Lutig. Mäßig schnelle Viertel II. Walzer. Durchweg sehr leise

III. Ruhig und einfach. Achtel IV. Schnelle Viertel V. Sehr lebhaft

Fl. 梅崎 真綾(学 3) Ob. 宮本 菜摘(学 3) Cl. 笠 歌純(学 3) Fg. 平川 真鈴(学 3) Hr. 佐藤 俊輝(学 3)

Intermission

ピアノ四重奏

C.C. サン＝サーンス／デンマークとロシアの民謡による奇想曲

Charles Camille Saint-Saëns (1835-1921) // Caprice sur des Airs Danois et Russes Op. 79

Fl. 福井 麻菜(学 4) Ob. 佐藤 千尋(学 4) Cl. 石橋 優安(学 4) Pf. 丸山 歩(学 4)

弦楽四重奏

F.P. シューベルト／弦楽四重奏曲 第 14 番 ニ短調 D.810 《死と乙女》

Franz Peter Schubert (1797-1828) // Streichquartett Nr. 14 d-moll D.810 "Der Tod und das Mädchen"

I. Allegro II. Andante con moto III. Scherzo : Allegro molto IV. Presto

Vn. I 松本 志絃音(学 4) Vn. II 山下 智史(学 4) Va. 山本 里真(学 4) Vc. 原 美月(卒)

Program Notes



D.スキッドモア／リチュアル ミュージック

デイヴィッド・スキッドモアはアメリカの打楽器奏者であり作曲家。ノースウェスタン音楽大学で修士号を取得。2005年には打楽器アンサンブル「サードコーストパーカッション」を自ら設立し、演奏、作曲活動を展開。同アンサンブルは、2017年にグラミー賞の最優秀室内楽賞を受賞するなど、世界的に高い評価を得ている。彼の作品は、クラシック、ポップス、ロック、アヴァンギャルド、映画音楽と幅広いジャンルにわたっている。

《リチュアル・ミュージック》はシカゴのダンスグループ「Raziel」のために書かれ、2005年春、彼らの講演によって初演された。タイトルにある「リチュアル」とは英語で宗教的な儀式を意味する。原始的で、荒々しい音色とともに、対位法やセリー（音列主義）風の発想と処方を用いられ、曲中のマリンバのピッチ、リズムカルなモチーフ、フレーズはすべて数値化されている。そのため数値的で機械的な音楽基盤に激しく管理されているが、儀式の音楽の呪文は強力な印象を聴き手にもたらし、楽器が叫び、うめき声をあげ、時に泣き叫ぶかのようである。

（学 3 栃下 紗奈）



T. エスケシュ／サクソフォーン四重奏のための《ル・バル》

ティエリー・エスケシュ(1965-)は、120 以上の作品を発表し数多くの賞を受賞しているフランス屈指の作曲家であると同時に、サンエティエンヌ・デュ・モン教会のオルガニストとして活躍している。

エスケシュの作品は様々な時代の音楽要素を取り入れた斬新な現代音楽で、この《ル・バル》も同様である。ジャン＝イヴ・フルモーサクソフォーン四重奏団に捧げられた作品で、2003 年ワールドサクソフォーンコンGRESSで初演された。《バル》はフランス語で舞踏会を意味し、本人は「オーケストラ的な感覚も要求する」とコメントしている。単一楽章だが、大きく五つの場面に分かれる。

冒頭の「モデラート」は変拍子のようなアクセントを伴うバリトンのオスティナートに、ソプラノ・アルト・テナーの3つの楽器が呼応する形で幕を開ける。続く「ヴィヴァチッシモ」は急回旋するワルツ風。重々しい伴奏と息を切らすような強弱を伴う旋律が楽器を何度も入れ替えながらワルツを織り成す。場面を一転した「モデラート・エネルギーコ」は、不規則な拍子で歪められたタンゴをトゥッティで表現する。歩調を落とした「アンダンテ」へ移行すると、曲線的な背景と点描的な動機が幻想的な音響空間を作り出す。終結部「アレグロ・モデラート」で冒頭の回帰を経て、これまでの再現を自在に繰り返しながらクライマックスへと突き進む。サクソフォーンの機能美を余すところなく表現した楽曲である。(矢澤 亘)

(学 3 矢澤 亘)



P.ヒンデミット／5つの管楽器のための小室内楽曲 作品 24-2

20 世紀ドイツを代表する作曲家一人のパウル・ヒンデミットが 1922 年に作曲した室内楽曲である。指揮者、ヴァイオリナ奏者でもあったヒンデミットは、ヴァイオリン、クラリネット、ピアノも演奏できる多才な音楽家であった。時代に合わせてロマン派からの脱却を目指し、個人の内面と探求の表現を目指したドイツの美術運動「新即物主義」を推進した。この曲もちょうどロマン派から新即物主義に変わっていく時期に書かれている。

第 1 楽章は、行進曲のような雰囲気ですら愉快に始まり、各楽器で主題が受け継がれる。中間部では旋律に 3 連符が出てきて、伴奏が 16 分音符で足踏みをしている中、逆らうように旋律を歌う。第 2 楽章は全体を通してとても静かなワルツでフルート奏者はピッコロに持ち替えて演奏する。第 3 楽章も静かに始まるのだが、どこか素朴で田舎の風景が想像される。中間部はボレロ風のリズムに乗ってオーボエとファゴットが、ダブルリードの合わさった魅力的な音色で叙情的な旋律を奏でる。第 4 楽章に入ると突然、フォルテッシモとなり、トゥッティの短いフレーズと各楽器のソロのカデンツァが交互に演奏され、そのまま第 5 楽章へ向かう。強く重厚な和声が奏でられるが、8 分の 6 拍子や 8 分の 12 拍子ではなく、4 分の 6 拍子、4 分の 9 拍子の複合拍子で書かれており、4 分音符の重みのある響きを伴って最後まで駆け抜けていく。全体を通して、ヒンデミット独特の調性、不測的に中断、再開されるアーティキュレーション、「新即物主義」というのは一体どういうことなのかという点に注目して、お聴き頂ければ幸いである。(笠 歌純)

(学 3 笠 歌純)



C.C. サン＝サーンス／デンマークとロシアの民謡による奇想曲

カミーユ・サン＝サーンスは 1835 年に官吏の家庭に生まれたフランスの作曲家。モーツァルトと並び称される 神童タイプで、2 歳でピアノを弾き、3 歳で作曲をしたと言われている。1848 年に 13 歳でパリ音楽院 に入学して作曲とオルガンを学ぶ。オルガンの即興演奏に素晴らしい腕を見せ、1857 年には、当時パリのオルガニストの最高峰とされたマドレーヌ教会のオルガニストに就任。1871 年にはフランク、フォーレとともにフランス国民音楽協会を設立し、近代フランス音楽の基礎を形作った。

《デンマークとロシアの民謡による奇想曲》は 1887 年にフランス赤十字が企画した演奏会のため書かれ、元デンマーク王女でロシア皇帝アレクサンドル 3 世の皇后マリア・フォードロヴナに捧げられたが、少し前の 1879 年にフランスで結成された「管楽器のためのフランス室内楽協会」のメンバー、P.タファネル(Fl.)、G.ジレ(Ob.)、C.チュルバン(Cl.)とロシアに行き、そこで共演をすることが作曲のもう一つの目的だった。

序奏部と 3 つの部分からなり、続けて演奏される。序奏部は管楽器とピアノの華やかな分散和音で始まりはじまり、主要主題は 3 つの部分で構成されている。第 1 部はデンマークの俗謡《王妃ダグマール》の旋律を用い、各楽器が美しく悲しげに語り、その後変奏曲が続き、牧歌風旋律が中間に歌われ、再び俗謡主題に戻る。第 2 部は皇后の姉アレクサンドラが英国に嫁いだことから、英国風の牧歌主題に引き継がれ、各楽器で自由に奏でられる。第 3 部はピアノ伴奏に乗った軽快なロシア民謡風主題に次いで、先に現れた各国の変奏主題が交錯し、最後のコーダは軽快な主題 が引き継がれ、華やかに幕を下ろす。

(学 4 丸山 歩)



F.P.シューベルト／弦楽四重奏曲 第 14 番 ニ短調 D.810 《死と乙女》

《死と乙女》が作曲された 1824 年、シューベルトは病の再発に苦しめられ、死を身近に感じていたとされており、全ての楽章が短調で書かれていることからその心情が伺える。

第 1 楽章はソナタ形式がとられ、印象的な主題に始まり、荘厳な中にも様々な表情を見せながら進んでいく。第 2 楽章の変奏曲主題には、1817 年にマティアス・グラウディウスの詩を引用し自作した歌曲《死と乙女》D.531 のモチーフが用いられているため、この弦楽四重奏曲も《死と乙女》と呼ばれる。このモチーフは、歌曲の最後に死神が乙女に対し "Sollst sanft in meinen Armen schlafen."（私の腕の中で安らかに眠れ）と歌う箇所の旋律である。また、歌曲と同様に変終止(アーメン終止)で曲が閉じられていることも併せて、乙女に自身の姿を重ね合わせ、迫り来る「死」とは決して恐ろしいものではなく、永遠の安息であると信じ、それを願って神拝しているようにも感じ取れる。

そして、ダンスの即興伴奏や舞曲なども好んでいたシューベルトは、第 3 楽章に自身のピアノ曲《12 のドイツ舞曲(レントラー)》より第 6 曲を転用しており、第 4 楽章にはロンド・ソナタ形式のタランテラ風のフィナーレを置いている。

(学 4 松本 志絃音)

曲目解説指導：那須田 務（講師）